

宇都宮市逆面地区での実現可能なエコツアーの検討 Studying the feasibility of eco-tours in Sakadura-district, Utsunomiya city

○畠山 陵*、守山拓弥**

1. 研究背景：近年、農村部では高齢化や過疎化により集落機能の低下が懸念される¹⁾。そこで、新たな地域活性化政策としてエコツアーと呼ばれる活動が注目されている¹⁾。エコツアーとはエコツーリズムの考え方に基づいて実践されるツアーの一形態であり、①自然や文化などの地域資源の健全な存続、②観光業の成功、③地域の経済振興をはかる、ことを目的とする²⁾。農村部でエコツアーとして活動を行うためにもこれらの条件を満たしたツアーを検討する必要がある。

2. 既往研究の整理：一場ら(2008)は尾瀬ヶ原における望ましい日帰りガイドツアーを、参加者に対してアンケート調査することにより明らかとした³⁾。また久保ら(2012)ではヒグマ観察ツアーに対する潜在需要の評価をし、ツアーを成り立たせるための需要を明らかにした⁴⁾。しかしこれらの研究は主に②観光業の成功という面だけに注目した研究である。またエコツアーとしてすでに実施している地域での研究がほとんどであり、農村部でエコツアーを実現するための研究例は少ない。

3. 研究目的：本研究では具体的な実例地区（農村部）を設け、その地区で行うエコツアーに対するニーズをアンケート調査により把握する。その結果から研究対象地での実現可能なエコツアーを検討することを目的とする。

4. 研究方法 **4-1. 研究対象地：**調査対象地は栃木県宇都宮市逆面町とした。本対象地は宇都宮市北部に位置する農村部である。同地区では“フクロウ (*Strix uralensis*)”をシンボルとした生物多様性の保全活動を行っている。また稲作体験やホテル鑑賞会などの地域の自然を活かした都市農村交流活動を多数実施している。**4-2. 研究構成：**逆面地区で実現可能なエコツアーを検討するにあたり、i)エコツアーの顧客層の把握、ii)エコツアー参加者の参加スタイルの把握、iii)逆面地区で運営可能なエコツアーのニーズ把握、iv)フクロウを対象としたエコツアーのニーズ把握、の4段階でアンケートにより調査をした。このうち、iii)とiv)の設問作成は次の手順で行った。iii)の設問作成にあたっては、逆面地区で実施されている都市農村交流活動に参加観察し、実施可能なエコツアーを調べた。また、エコツアーの価格設定のため先進地区への聞き取り調査を実施した。iv)の設問作成にあたっては、①および②の視点から、フクロウを観察しつつも影響を与えないツアーを検討するため、逆面地区で模擬エコツアーとして、試行的にイベントを開催した。研究の構成を Fig. 1 に示す。

4-3. アンケート方法：アンケートの対象は逆面地区に来訪する可能性を考慮し、関東地方在住者(栃木県、神奈川県を除く)とした。以上の広域でアンケートを実施することから、民間会社によるインターネット・リサーチ (WEB アンケート) を実施した。i)は 15000 名を対象、ii)から iv) は i) の対象者のうち、農村でのエコツアーに参加したことがあるモニター 120 名を抽出し実施した。120 名のモニターは性別、年代 (20~30 代・40~50 代・60 代以上) が均等になるよう配分した。

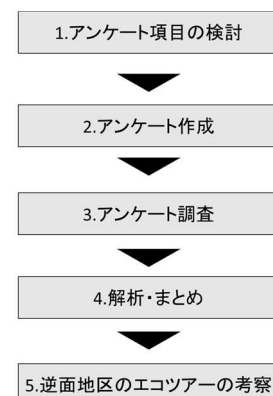


Fig. 1 アンケート構成

*栃木県 (Tochigi Prefectural Government Office), **宇都宮大学 (Utsunomiya university)

キーワード：環境教育，環境保全，生態系

5. 研究結果 5-1 逆面地区、先進地区の調査：同地区の既存の活動

に参与観察した結果、地区の自然を取り入れた活動が多くあり、今後エコツアーとして実施できると考えられた。また先進地区（星ふる学校くまの木など）への調査結果からツアー内容、価格設定の参考とした。

5-2 試行イベントの開催、ツアー検討：逆面地区のシンボルであるフクロウの観察会を試行的に実施した。イベントを開催した後①、②を満たすツアーを検討し“ナイトウォーク（フクロウ以外の生物の観察）”、“専門家によるフクロウの生態解説”、“観察用テント内での観察（鳴き声が聞こえる確率を上げる）”、“赤外線カメラによるフクロウの巣の観察（実際にフクロウを見る）”というフクロウ観察会に対して4つの追加オプション（属性）を設けた。

5-3 アンケート調査項目の設定：i）ではエコツアーへの興味と参加の経験、ii）ではエコツアーの参加人数、移手段、情報収集方法、iii）では逆面地区のエコツアーを既存イベント含め複数用意し、その中でどれに参加したいか、参加するにあたっての制約、iv）ではコンジョイント分析を用いフクロウ観察会でどの追加オプションを重視しているか、について把握する項目を設けた。

5-4 アンケート調査結果：i）15000名のモニターのうち、農村でのエコツアーに参加したことがあるのは8%であり興味はあるが参加したことがないのは70%であった。

ii)参加スタイルについては、大人1、2人で公共交通機関を利用する、情報はインターネットで収集する、という回答が最も多かった。iii)逆面地区のエコツアーで参加したいものはフクロウ観察会とそば祭りが、参加するときの制約は実施曜日が、参加費は年会費制よりエコツアーの都度払う形式がそれぞれ多く回答された。iv) コンジョイント分析により相対重要度を算出した(Fig. 2)。これより「生態解説 (32.1%)」、「観察用テント (28.3%)」が高い値を示した。

6. 逆面地区のエコツアーの検討：アンケート調査の結果より考察する。エコツアーの参加経験者は8%と少なかったが、興味はあるが参加したことがない人は70%と多く、潜在需要はあると考えられた。一方、逆面地区のエコツアーを、アンケートにより明らかとなった顧客が望むツアー内容を整理すると次のようになった。インターネットを活用した情報提供をし、年間を通してツアーを開催する。人気であったツアーとフクロウ観察会は数回開催し、開催曜日をばらつかせる。顧客を家族連れだけでなく大人のみを対象にしたツアーも行う。最寄駅への送迎を取り入れる。フクロウ観察会は専門家による生態説明と鳴き声を聞く確率をあげる観察用テントの使用を組み合わせ実施する。一方で、顧客ニーズにのみとらわれエコツアーを運営すると、エコツーリズムの重要な視点である①自然や文化などの地域資源の健全な存続および③地域の経済振興、の点で問題が生じる可能性もある。今後は、本研究によるアンケートを参考にしつつ、①、②に加え、③の視点での適切なエコツアーの運営方法の検討が望まれる。

引用文献・参考文献 (1) 真板昭夫 (2011) エコツーリズムを学ぶ人のために 世界思想社 (2) NPO法人日本エコツーリズム協会 [HPhttp://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what/](http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/what/) (3) 一場博幸・安類智仁・古谷勝則 (2008) 尾瀬ヶ原における望ましい日帰りの自然ガイドツアー実施方策に関する考察 (4) 久保雄広・庄子康 (2012) 選択型実験を用いたヒグマ観察ツアーに対する潜在需要の評価

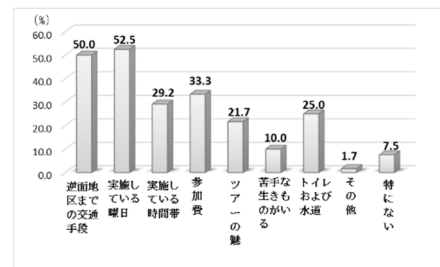


Fig. 2 逆面地区のエコツアーに参加する場合の制約

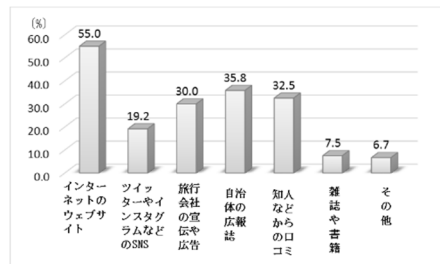


Fig. 3 情報の収集方法

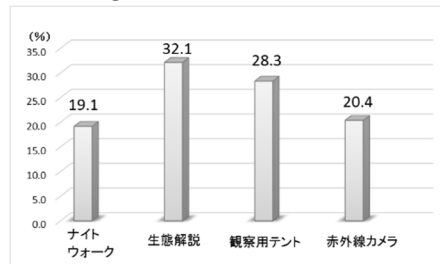


Fig. 4 相対重要度